PDF
だん暖たてやま
712
平成18年
2月1日号

PHOTO／青木繁名作の舞台を後世に　富崎地区連合区長会のみなさん

シリーズ 市民 232

地域をあげて後世に素晴らしい歴史を伝えていきたい

「私たちのころは、学校で青木繁の事を教わらなかったので知りませんでした。昭和36年に記念碑を建てる時に、昔の事を思い出し、布良が有名な絵の誕生のきっかけになった事を知りました。

除幕式の時は、当時笛吹童子の曲で有名な福田蘭堂氏が来たので騒ぎになりましたね。また、昨年暮れの催しで、この記念碑の設計者が生田勉東大教授だったことが紹介され、この記念碑が建造物として貴重な財産であることが分かり、当時のまま残る小谷さんの家とともに、地域をあげて保存につとめていきたいとみんなで話しています。安房自然村の前を過ぎ、白浜方面に向かう国道410号から入ってすぐの所に記念碑は建っています。眺望も良いので、多くの人が記念碑に来ていただければと思います。私たちこの地域の区長会が中心になって、後世にこの地域の素晴らしい歴史を伝えていきたいですね」富崎地区連合区長会長吉田昌男さん（4～5ページに関連記事を掲載）

▲記念碑と伊豆大島

PROFILE 青木繁と海の幸記念碑

富崎地区の阿由戸の浜を見下ろす山の中腹に、大きな石碑が建っています。この碑は明治を代表する洋画家・青木繁の記念碑で「青木繁　海の幸ゆかりの地」と刻まれています。青木の没後50年の昭和36年（一九六一年）、代表作「海の幸」の誕生のきっかけになった布良の地に、若くして亡くなった青木繁を永く追慕するため、当時の田村利男館山市長が発起人になり、青木の画友も賛同し建立したものです。

お茶の間博物館 245

神戸地区犬石の犬と石にまつわる話

今年は戌年ということで、神戸地区の犬石という地名が、先月ふたつの新聞で取り上げられました。犬が石になったという話で、これにはふたつの伝説があります。

ひとつは洞穴にまつわる話です。その昔、西岬地区浜田にある鉈切洞穴の中へ修験僧が犬を連れて探検に入ったところ、僧はとうとう戻ってきませんでした。犬だけは赤膚になって犬石の洞穴から出てきたのですが、表へ出るとたちまち石になってしまったのだそうです。そしてその場所に犬石権現がお祀りされたということです。もうひとつは、犬石の金蓮院というお寺の創立由緒に関わるものです。鎌倉時代にこの寺を開いた頼智という僧が、伊豆から平砂浦の海岸にたどり着いたところ、一匹の白犬がやってきて衣を引きます。ついて行くと岩山のふもとで動かなくなったので、よくみると犬ではなくそれは石だったというのです。そこでその場所に祠を建てて犬石権現と呼び、岩山の側に草庵を結んで、今の金蓮院ができたというお話です。

ともに犬石の地名の始まりとして伝えられている伝説です。犬石権現は今は犬石神社に移されていますが、以前は青年館の場所にありました。その敷地にある小岩の上には犬の石像が今も置かれています。金蓮院はこの犬石権現跡のすぐ東側にあり、本堂の裏には飛錫塚と呼ばれる岩山があります。

この岩山の上には竜宮から上がったと伝えられる枕字石という棒状の石があります。この石は270年ほど前の江戸時代中頃に、平砂浦の海岸に打ち上がったものだそうです。当時、拾った村人が牛小屋に埋めて繋ぎ石にしたところ、夜中に光輝いて牛が騒ぎ出すという事件が起りました。よく見ると、石には梵字のようなありがたい文字と、鳥の足跡のように見える文章がありました。波に洗われて読むことはできないものの、この奇跡を見た村人たちは大切に崇め、飛錫塚に安置したのだそうです。

その数年前の享保年間には、一石に一文字ずつ経文を書いて一万九千500個の石を埋めた経塚が、この飛錫塚につくられています。周囲からとても目立った飛錫塚という岩山は、犬石という地名に関わって、犬と石にまつわる伝説をたくさん生みだしていたようです。

▲犬石権現跡（青年館）

市立博物館の2月の休館日は6日、13日、20日、27日。3月の休館日は6日、13日、22日、27日です。

青木繁《海の幸》

1904年（明治37年）

油彩・カンヴァス／70.2×182cm

国指定重要文化財

石橋財団石橋美術館蔵

今年も《海の幸》をブリヂストン美術館で展示
「石橋財団50周年記念雪舟からポロックまで」
2006年4月8日（土）～6月4日（日）
青木の作品は、《海の幸》、《わだつみのいろこの宮》（国重要文化財）、《天平時代》の3点が展示される予定です。

※原画の色彩は館山市図書館に寄贈された東京文化財研究所・石橋財団石橋美術館編青木繁《海の幸》でご覧ください。

当時のまま家を残していきたい

青木繁《海の幸》100年から布良・相浜を見つめる集い

昨年12月４日、富崎地区連合区長会（会長吉田昌男）のみなさんとNPO南房総文化財・戦跡保存活用フォーラム（理事長愛沢伸雄）主催による「"青木繁《海の幸》100年"から布良・相浜を見つめる集い」（館山市・館山市教育委員会後援）が富崎小学校で開催されました。集いには100人を超える参加者があり、午前中は「海の幸」ゆかりの布良を歩くフィールドワーク、午後に東京文化財研究所美術部の田中淳氏による講演と座談会が開催されました。

青木繁が布良を訪れたのは、一九〇四年（明治37年）の夏。昨年、この作品が描かれて100年を迎え、この作品に関する共同調査研究が東京文化財研究所と絵を所有する石橋美術館（福岡県久留米市）の手で行われ、その成果が報告書にまとめられるとともに、昨年9月から10月にかけて東京のブリヂストン美術館で特別展示「青木　繁　〝海の幸〟100年」で公開されました。

集いでは地元富崎小学校の児童による「安房節」が披露され、児童による青木繁の調査発表が行われました。

また、田中淳氏の講演では、「〝海の幸〟誕生のきっかけは、この時、同行した友人の坂本繁二郎（画家、後に文化勲章受賞）が港で見た光景を青木に話したのがきっかけとなって、その想像をもとに描いたものといわれています」などのエピソードを披露しました。また、青木が布良に来た理由として、「青木が神話の古代世界に傾注しており、安房神社と自然にあこがれ、来たのではないか」と語りました。

座談会では小谷家の当主、小谷栄さんが「当時、母が6歳で、親から（彼らが滞在した）部屋をのぞくなと言われ、一度だけ部屋の中が見えたら、女の人が裸で座っていたそうです。これからもこのまま家を残していきたい」と決意を表明しました。

▲田中淳氏による講演

今から100年前の布良でのできごと
青木繁と「海の幸」を知っていますか？

青木繁は明治浪漫主義を代表する洋画家で、明治15年（一八八二年）福岡県久留米市で出生。洋画家を目指し中学校を中退し上京、東京美術学校に入学し黒田清輝らの指導を受けました。在学中、絵とともに古代神話の世界に興味を持ち、それがその後の彼の作品に大きく影響を与えました。

美術学校を卒業した22歳の夏、友人の森田恒友や坂本繁二郎、恋人の福田たねと写生旅行で布良を訪れ、網元の小谷家に約2か月滞在しました。滞在中、布良の海を題材に多くの作品を描きましたが、帰京後、描かれたのが、代表作「海の幸」（国重要文化財）。青木は翌年も福田たねを伴い館山を訪れ、伊戸の円光寺に滞在しています。帰京後、恋人の福田たねが長男幸彦（後の福田蘭堂）を出産します。

しかしながら幸福な時間は続かず、作品に対する当時の評価や疾病などにより不遇な人生を送り、単独で九州に戻り、明治44年（一九一一年）3月、放浪生活の末、福岡の病院で28歳で亡くなりました。青木の死後作品の評価が高まり、「海の幸」が昭和42年、「わだつみのいろこの宮」が昭和44年に相次いで国の重要文化財に指定されました。

館山では昭和36年（一九六一）、青木の死後50年に彼の偉業をたたえる記念碑を当時の田村館山市長が発起人となり青木の画友の協力もあり建立。福田たねと青木の遺子幸彦の手により、この碑の除幕式が行われました。布良の地が誕生のきっかけとなった「海の幸」は、近代日本美術史を代表する作品として評価されています。

▲青木繁が滞在した小谷家

催しに参加した山口さんから寄せられた手記

特別寄稿「喜禄」（小谷家）は残った　　山口栄彦

「青木繁、海の幸記念碑予定地」という表示の柱を見たのは、40年以上前になる。その後、著書や画集をあさり、青木繁に魅せられ続けた。

一昨年には拙書「布良崎に青木繁記念碑」の章が、独立行政法人「東京文化財研究所」美術部の田中淳氏の目にとまったことで、「青木繁と海の幸」に対する関心を一層深めることになった。

昨年12月４日、「布良・相浜をみつめる会」が開かれた。NPOの皆さんと吉田昌男富崎地区連合区長、豊崎栄吉神田町区長、満田満雄向区長をはじめとする住民の協力で成功したこの催しのなかで、100人の参加者の前で、小谷家の保存が当主の栄氏によって表明された。

このことは、布良、相浜はもちろん、館山市にとっても画期的なことであり、芸術と漁村文化の殿堂が生まれるのもそう遠くはないだろう。布良在住の友人は「青木繁と布良、相浜」について書いたらと言う。いつかそのすすめを実現してみたいものだ。（布良出身のエッセイスト、川崎市在住）

注：「喜禄」小谷家の屋号